

ピンクリボンNEWS japan

2012年 No.2

冬号

発行人 特定非営利活動法人 J.POSH 編集 ピンクリボンNEWSjapan 編集委員会
発行所 J.POSH事務局〒538-0043 大阪市鶴見区今津南2丁目6番3号 TEL.06-6962-5071

J.POSH
日本乳がんピンクリボン運動®

TOPICS

乳癌検診の個別化と最新画像診断装置

神戸アーバン乳腺クリニック 奥野 敏隆

3年前のことです。「40歳になったので乳癌検診を受けたら、引っかけました」とMさんが私の診察室に飛び込んでこられました。Mさんのお母様も10年前に乳癌で手術を受けておられます。そのとき、「ひょっとして、遺伝？」とはっとしました。というのは、お母様は両側乳癌で、さらに、伯母さんも乳癌で私の患者さんです。明らかな家族集積性と両側性、若年性といった遺伝性乳癌の特徴があったからです。Mさんには遺伝性乳癌の可能性についてお話ししました。遺伝子検査は行っておりませんが、娘さんには自己検診を指導するとともに、25歳から乳癌検診を受けるようお願いしております。幸い3人とも癌の再発なくお元気です。

Mさんのように乳癌になる可能性が高い集団、すなわちハイリスクグループに対する乳癌検診について、昨今研究が進んでいます。乳癌発症の危険因子(リスク)として、1. 乳癌の家族歴、2. 胸部への放射線治療歴、3. 乳腺腫瘍に対する生検既往歴などが挙げられます。なかでも乳癌の家族歴が重要です。乳癌は遺伝性素因により発症する遺伝性乳癌と、これには関係なく発症する散発性乳癌に分けられます。家族歴のある方は遺伝性乳癌である可能性が20数%あるといった研究結果もあり、その場合は一生のうち乳癌を発症する可能性は36~80%に及びます。遺伝性乳癌には両側性、若年発症、トリプルネガティブ(ホルモン感受性陰性、HER2 蛋白発現陰性)が多いといった特徴があり、これらの特徴に則した検査法を要します。乳癌検診において最も広く用いられているマンモグラフィは乳腺が厚い若年者では病変の検出力が劣ります。超音波は検査に伴う負担が少ないですが、客観性・再現性が乏しいとされています。そこで注目されているのがMRI(核磁気共鳴画像法)です。造影MRIの乳癌検出力はマンモグラフィや超音波よりもはるかに優れているからです。

乳癌ハイリスクグループに対するスクリーニング検査として、マンモグラフィ単独では感度(乳癌であると診断する確率)52%、特異度(乳癌でないと診断する確率)91%、マンモグラフィと超音波の併用では感度76%、特異度84%であるのに対して、これらにMRIを追加すると感度100%、特異度65%といったデータがあります。MRIを追加すると、乳癌の拾い上げには有用であるものの、良性を乳癌と誤って判断する傾向が高くなります。また、MRIの装置はマンモグラフィや超音波のように普及していません。さらに、検査に要する費用は10倍近く違います。このようなことを踏まえ、日本乳癌検診学会が中心となって乳癌発症ハイリスクグループに対する乳房MRIスクリーニングに関するガイドラインが制定されました。そこには任意型検診(がん検診には行政主導で行う「対策型検診」と人間ドックや職場健診など、健康診査を目的とした「任意型検診」があります)で行うこと、質の高い乳癌の診断・治療を行うことのできる施設で行うこと、造影検査を行うこと、などが明記されています。MRIで見つかった病変に対する組織生検も課題です。超音波診断装置の分解能および画像処理技術の進歩により、MRI画像を参照しながら超音波で微小な病変を見つけるセカンドルックエコーも広く行われるようになりました。また、MRIと超音波画像をコンピュータでリアルタイムに同期させるReal-time virtual sonographyを用いてMRIで発見した病変を超音波で同定し、超音波ガイド下に穿刺生検を行う試みも行われています。

—個々のリスクに応じた乳癌検診の個別化とそれを支える超音波、MRIといった最新画像診断装置—、診断・治療の個別化といった今後の乳癌診療の大きな流れを、乳癌検診においても垣間みることができます。「あなたにあった検診はこれです。」と言ってももらえれば、乳癌検診を受けようと思いませんか？

目次

TOPICS「乳癌検診の個別化と最新画像診断装置」	1
乳癌 Ture-Zure「東京スカイツリーがピンク色に染まりました」	2
各地の「乳がん月間」キャンペーン	3
ジャパンマンモグラフィ・サンデーアンケート結果	4
あとがき	4

乳がん Ture-Zure リレーコラム 第2回

「東京スカイツリーが ピンク色に染まりました」

癌研有明病院 蒔田 益次郎

2012年10月1日、東京スカイツリーがピンク色に染まりました。

昨年3月11日の未曾有の大震災に耐えて、今を生きる日本人がそれぞれの想いを重ね、新しく生まれ変わる日本を託すような気持ちでツリーを見守りました。そして、今年5月にオープンした東京の下町に立つ高さ645メートルの巨大なスカイツリー。日によって「粋」と「雅」の2種類の色に照らされる江戸っ子、いや東京っ子のシンボルがこの日はピンクに染まりました。10月は乳がん啓蒙啓発月間。一日はそのことが広く浸透した証としてこの巨大なツリーが東京タワーやレインボーブリッジと共にピンク色に染まった夜でした。

ひと昔前は「乳がん」の病名を明かすこともできなかったのが、今は一つの病名として受け入れられている。しかし、まだまだ理解されているとは言えないでしょう。年齢階級別がんの罹患数のデータを見ますと女性の30歳から60歳くらいまでの1位が乳癌です。まさに乳癌は働き盛りの女性を襲う病気なのです。

2003年に実施されたがん体験者の悩みや負担などに関する実態調査報告書「がんと向き合った7,885人の声」によると、診断時点で会社勤務だった人が同じ会社に勤務しているのは半数以下で、3人に1人が離職していると報告されています。また、がん体験者が抱える悩みや負担の中で、「就労・経済的負担」は、「不安などの心の問題」「症状・副作用・後遺症」「家族・周囲の人との関係」に次ぎ、4位と上位であったと報道されています。がん患者が就労し続けるために必要なものを聞いた調査では雇用継続の視点からは、がんと付き合いながら仕事ができるよう、病気への理解、労働時間を考慮する、休暇を取得しやすい労働環境づくりを求める声が多かったと報告されています。

乳癌は糖尿病や高血圧といった生活習慣病

とは違い、再発予防が功を奏することができれば治癒する病気です。再発予防のためにつらい抗がん剤治療を一定期間受けることになるのです。がんの再発を予防するための、治癒するための治療を補助療法といいます。山を登るとき、一気に登ってしまう人はいません。どこかで休むものです。山登りの途中で休んでいる人はそこで休むことを蔑視されることはないのです。補助療法は一生続く治療ではなく山登りの途中の休憩のようなもの、再び元に戻ってまた登っていきけるのです。

今年の6月がん対策推進基本計画が発表されましたが、その中でがん患者の就労を含めた社会的な問題、が取り上げられています。今や2人に1人はがんを経験する時代となり、政府は「がん患者等の就労を含めた社会的な問題、がんの教育などの課題も明らかとなり、がん患者を含めた国民はこうした課題を改善していくことを強く求めている。」という認識に至っています。10月にはその具体策として、がん患者の就労支援でがん診療拠点病院に労働関係の法律に詳しい社会保険労務士や心の悩みにも対応できるようにカウンセラーたちによる相談会を開くことなどを実施していくために、5億円の概算要求を盛り込んだと報道されています。

ピンクリボンの由来は一説によると「昔アメリカの小さな町で、乳がんで死亡した女性の母親が、この女性の娘である実孫に、同じ悲しみを繰り返さないよう、願いを込めて手渡したものがピンク色のリボンであったことに端を発する」そうです。ピンクリボンは世界に広がり乳がんのことを思い起させる象徴となりました。そして、今年の第8回ピンクリボンデザイン大賞の作品はある会社のホワイトボードに書かれた職員全員のある日のスケジュール表。そのなかのひとりの職員のスケジュールに15:00から乳がん検診と書かれている、そういう光景でした。

がんという病気は他人事ではない時代。企業や社会が乳がんのみならずがんという病気を理解し支えあっていく、そんな未来がくることを期待したいと思います。

各地の「乳がん月間」キャンペーン

10月の乳がん月間に合わせて、全国各地で個人の方々、企業・団体、自治体を中心となり「乳がん撲滅」を多くの方々に街頭で呼びかけをされました。また各地で開催されましたスマイルウオークに参加された方もいらっしゃったことと思います。年々大きな力となり、多くの地域で、その活動が広がっています。早期発見のために検診に足を運ぶ方々が増えることを願って。

街頭キャンペーン

ピンクのオリジナルブルゾンを着用し、全社を挙げて道行く人へ乳がん啓発チラシとオリジナルティッシュを配布し、検診の呼びかけをされました。



通行中の方々に啓発チラシとオリジナルティッシュを手渡し検診をアピール（東京・大手町にて）

「早期発見で笑顔の暮らしを」多くの方々に、リーフレットを配布し、この声が届くよう全国各地で街頭キャンペーンを実施されました。



男性社員も率先してピンクのブルゾンを着用し、啓発活動に取り組む（東京・銀座にて）

ライトアップ

北海道五稜郭、札幌の百貨店で乳がん月間にライトアップがされました。多くの方々にピンクリボンの広報が出来たのではないのでしょうか。



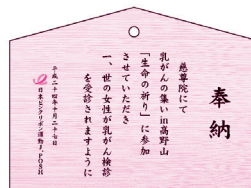
ピンクにライトアップされた五稜郭タワー（北海道・函館市）



百貨店の垂れ幕掲示で乳がん検診の啓発を（北海道・札幌市）

乳がんの集い in 高野山

全国の患者会の皆様が、約200名参加され、真言宗の聖地高野山に集い、慈尊院への絵馬奉納にはじまり、ウォーキング、セミナー、写経に参加され書道家による揮毫などを見学されました。



その他、ピンクリボン啓発活動を推進されている多くの方々が、乳がん月間のキャンペーンに参加されました。

ジャパン・マンモグラフィサンデー(JMS)アンケート結果速報

本年度で4回目を迎えましたJMSプログラム、10月21日(日)に全国340ヵ所の医療機関から賛同いただき、4,833名の方々が受診されました。プログラム当日に各受診者と医療機関を対象にアンケートを実施いたしました。速報値になりますが集計結果です。(11月20日現在)

受診者

回答数：3,868人【11月20日現在】

()内は構成比

1.マンモグラフィ検診について

初めて	1,469人(38%)
毎年	868人(23%)
2年に1度	648人(17%)
数年前	778人(20%)
その他	94人(2%)

2.受診された理由

日曜日だから	1,692人(31%)
市民検診	1,564人(29%)
予防のため	634人(11%)
家族のすすめ	475人(9%)
JMSを知って	309人(6%)
無料クーポン受給	278人(5%)
友人、職場のすすめ	254人(5%)
不安があるので	225人(4%)

3.これからも受診されますか

受診します	2,765人(72%)
機会を見て受診します	1,085人(28%)
受診しません	5人(-)

4.年齢

20-29歳	203人(5%)
30-39歳	759人(21%)
40-49歳	1,070人(30%)
50-59歳	792人(22%)
60-69歳	574人(16%)
70-79歳	178人(5%)
80歳以上	25人(1%)

医療機関

回答数：234医療機関【11月20日現在】

()内は構成比

1.2012年度JMSに参加していかがだったでしょうか

良かった	198(85%)
よくなかった	4(2%)
どちらでもない	19(8%)
無回答	13(5%)

2.今回の結果について

予約定員	5,296人
実受診者数	4,883人
(内訳)	
自主検診	2,306人(47%)
市民検診	1,519人(31%)
無料クーポン使用	874人(18%)
その他(人間ドック等)	123人(3%)
企業検診	61人(1%)

(((医療機関の声)))

- ・受診者は少数でしたが、丁寧に出来て良かった。
- ・年々来院数が増えています。継続してやりたい。
- ・日曜日の検診需要がたくさんあると実感した。
- ・受診者からプログラムの継続の要望が高かった。
- ・地域貢献に参加している意識が出た。

(((受診者の声)))

- ・実施病院やJMSのPRがもっとあればと思いました。
- ・安価で気軽に受診できるようにしてほしい。
- ・10月だけでなく年数回やって欲しい。
- ・仕事をしているので日曜日だと助かります。
- ・検査の痛みを強く感じる事がなくホッとしました。

PRNj 冬号あとがき

過ぎました10月は、乳がん月間を迎え、多くの方々が、ピンクリボンの啓発活動を目にされ、また参加された方もいらっしやっただけではないでしょうか。

NPO法人J.POSHでは、本年もジャパン・マンモグラフィ・サンデー(JMS)を全国340の医療機関に賛同をいただき、約5000名の方が、受診されました。マスメディア、自治体、医療機関ならびに各企業・団体の広報活動を通じ、受診に行こうと思われる方々が、少しずつ増えてきた結果ではないでしょうか。

くる年も皆様と共にあらゆる機会を通じて、ピンクリボン啓発活動を推進していければと願っております。

ピンクリボン NEWS japan 編集委員

奥野 敏隆 (神戸アーバン乳腺クリニック)

軽部 真粧美(自治医科大学附属病院 看護部)

重岡 靖 (淀川キリスト教病院 腫瘍内科)

田中 完児 (リボン・ロゼ田中完児乳腺クリニック)

蒔田 益次郎 (癌研有明病院 乳腺外科)

吉野 裕司 (石川県立中央病院 乳腺外科)

(五十音順・敬称略)